

6月5日（日）、陣屋跡の待機ガイドの際、「国登録有形文化財『秋元家住宅土蔵』見学会」に参加し、博物館の北澤次長の説明で土蔵内部の見学をさせていただきました。

すでに見学をされておられる方も多いかと思いますが、私にとっては貴重な経験で大変勉強になりましたので、内容をまとめてみました。

尚、このレポートは、午後の部の見学会に参加された、同じく新入会員の秋山さんから見学時の情報をいただいております。

説明の聞き間違いや、理解間違い等もあるかと思いますが、その場合はご指摘いただければ幸いです。

1. 一階部分の外観：

一階部分の土壁が、ある所を境に上のほうと下の方で色が異なっている。上は黄色っぽく、下は茶色っぽい。北澤次長の説明では「新たに築いた土台の上に、運んできた土蔵を乗せ、土壁が剥がれた下の部分に新たに土壁を塗り直したことがわかる」とのこと。

2. 土蔵入口：

南側（道路の反対側）に入口があり、観音扉。土扉で実際に動かしてみたが非常に重かった。入口は地面から階段（2段）があり、一階の床面は地上から高い位置にある。火災はもちろん水害にも強いと感じた。観音扉の中の引戸は人が入る時に開ける小さい扉と、大きい荷物などを入れる場合の全面開閉扉が一体になっていて、普通は小さいほうの引戸を開けて入る。

3. 一階土蔵内部：

一階の床は傷んでおり、特に四隅は強度が不十分で危険とのこと。端には寄らないよう注意があった。床板が傷んでいるのは、「床下に発酵食品（酒、味噌など）を保存していたと聞いており、菌の影響で傷んだと思われる」とのこと。尚、一般公開の時は一階の床は張り替える予定で、二階は問題ないので手を加えずそのまま、とのこと。

入口入って左の隅の一部分は、床板を剥がしてあり、床下部分の基礎に大谷石が使われていることがわかる。

（写真1参照）

その四隅の上の入口側の壁の部分は、内部調査のため、一部板が外してあって、土壁がむき出しになっている。構造材として竹が組み込んであるのが見える。また、床に近い部分は板張りでその板張りの上部が土壁になっている。（写真2参照）



写真1：1階床下の大谷石部分



写真2：1階土壁部分

「縦方向の竹と竹の間の部分には、縦方向に上から下へ密に縄が埋め込まれている。土壁にはヒビ割れがあるが、ここは横方向に竹が入っている箇所。この部分は土壁を塗り直してもいずれヒビが入るので手を加えずそのまましておく。横割れなので壁自体には問題ない」とのこと。

北澤次長によれば、「壁の中まで見ることができる機会はなかなか無い。今回のように解体とか修理などの時しか見ることができないので、貴重だ」とのこと。

一階の床下は物置として使われていたようだ。北澤次長によれば、秋元前当主から聞いた話として、「戦時中の配給制の時代に缶詰とか砂糖などを隠しておいて、お腹が空くとここに来てゴソゴソ缶詰などを取り出して食べたことがある」などと話されていたとのこと。

また、男性用の陶器製の小便器（絵入り）が1階の床に置いてあったが、これも当初は床下に置いてあったもので、「お金持ちでないと持てないもの。たぶん別の場所で使っていたが、使わなくなり、もったいないので床下に保管しておいたようだ」とのこと。（写真3参照）

二階への階段は、今あるのは後から作ったもので、元の階段は入口を入れてすぐ右のところにあり、とても急な階段だったようだ。天井をよくみると、梁が途切れていたりして、その跡が確認できる。（二階の床からも同様に確認できる）（写真4参照）



写真3：小便器



写真4：階段

北澤次長による「建物を見学するときのポイント」レッスン：

- ① 使われている板材が新しいものか古いものかを見分けるには、使われている釘の頭を見る。四角いか丸いか。四角であれば戦前以前のもの
- ② 板材の裏側を見る。古いものは鋸で挽いた跡があり、そこから使った鋸の種類、古いか新らしいか等がわかる場合がある

4. 二階部分：

北澤次長の説明によれば、「ここ（土蔵）に来る途中、閻魔堂のあたりから見ると屋根が凹んでいるように見えたが、中から見ると、梁が折れたり、ヒビが入っているために 屋根が凹んでいるということではなく、瓦の下に入れてある土が何らかの原因で中央部で落ち込んだため、瓦が凹んだのではないか」とのこと。また、梁には亀裂が入っていたが、木の目に平行の亀裂であれば問題ないとのこと。

(写真5, 6 参照)



写真5：土蔵屋根外観



写真6：2階屋根部分の梁

いつ頃の土蔵か、という点については「古い建物の場合、屋根裏の上の方に「棟札」という“何年何月に建造した”ということを書いた板があるのだが、この土蔵には無く、いつ建てられたのかは不明」とのこと。ただし、「墨書」が3カ所ほど見ついている。

一つは二階の窓（建物西側）の左側上部の板に「二拾五年五月四日 直吉」とあり、これは「江戸時代以降25年も続いた年号は明治しかなく、明治25年5月4日、直吉という者が修理か何かをした時のものだろう」とのこと。(写真7参照)

二つ目は同じく二階の窓の右側の板に「明治二拾参年・・・直ス」とあり、これも「明治23年に扉を直した時に書いたものだろう」とのこと。この部分には「墨書」が2箇所確認できるが、「内容は同じで、最初左に書いたものを右のほうに書き直したと思われる」とのこと。(写真8参照)

(ちなみに明治23年は利根運河完成の年でもあるとの説明もあり。関連性はないが・・・)



写真7：「墨書」①



写真8：「墨書」②

三つ目は、二階への階段を上ったすぐの右側の柱のところで、「清水・御・金蔵」の文字が読めるとのこと。(残念ながら写真を撮るのを忘れてしまった。残念！)

最後に下の写真9は、二階の床にある格子状になっている部分で、これは一階から荷物を上げるためのものだった、とのこと。格子状の部分は簡単に取れるようになっていて、その隙間から荷物を上げたとのこと。(今は安全上横に柱を2本つけてある)



写真真9：2階床の格子状部分

北澤次長が初めてこの二階に入った時は、桐の箆笥が3棹、花嫁道具を入れる長持ちが5本以上(江戸時代のもの)あったとのこと。後に蔵の中の箆笥等を運び出すときは、この格子状のスペースではなく、階段を使って、下ろしたとのこと。

おわりに(感想)

一つの古い土蔵が、こんなにも多くのことを秘めていて、こちらが引き出そうとすれば、少しずつ語りかけてくれる、という史跡や文化財の調査のおもしろさを感じました。今回は一人一人がLEDライトで照らしながらの見学だったので、「墨書」を見つけた時などは皆さん「おーっ！スゴイ！」と興奮気味で、そんな探検気分も手伝って、楽しく、興味深く、大変勉強になる見学会でした。それにしても博物館の北澤次長の説明は分かり易く、上手でした。「さて、どこにあるでしょう？探してみてください」などと参加者に探させたり、考えさせたりすることで充実した見学会になっていたように感じました。

土蔵の整備が完了し、一般公開されることを今から楽しみにしています。

以上